



松尾松清〈風景（牧場）〉
油彩・カンヴァス 60.7×182.5 佐賀県立美術館蔵

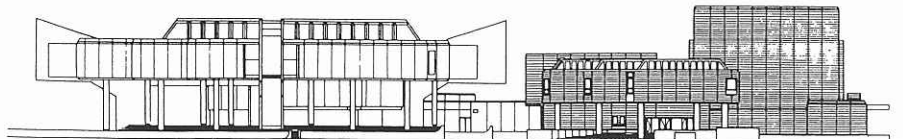
松尾松清は佐賀県出身であり、いまだその画歴の全貌が明らかにされていない近代洋画家のひとりである。本作品は数少ないと考えられる現存作品の中でも大型であり、高い完成度をほこる一品である。

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

15 December 2006

No. 137



研究ノート

「知られざる佐賀の画家たち」について

美術史の行間に生きる画家たち

8月8日から9月20日まで、当館にて「知られざる佐賀の画家たち」展を開催した。これはその名称のとおり、現在、確認できる現存作品がきわめて少なく、画業の評伝を欠く佐賀の近代洋画家について紹介するもので、内容は計5作家、6点の展示であった。

佐賀県の近代洋画史は、百武兼行(天保13—明治17)のヨーロッパ洋画修学をその嚆矢とし、久米桂一郎と岡田三郎助を中心とした東京美術学校の関係者、および「佐賀美術協会展」(大正3年第1回展開催、以下美協展)^①の出品作家等がその中心をなす。そこに登場する主要作家については作品の収集と調査研究が進んでいるが、一方で現在、作品をほとんど見出すことができず、その名を忘れられている作家がいる。いわば美術史の行間にいるかれらだが、そんなかれらの活動と作品の中に、実は佐賀県の美術史の実相がひそんでいるのではないかという思いがある。今回の展覧会と本報告が、かれらの新出作品の発見につながってゆくことを期待したい。

各画家の略歴と残された作品について

紹介した5人の洋画家については、現在、断片的に伝承される事実を紡ぐ程度しかできない状態である。以下、現時点で判明している画歴や事柄をあげ、それぞれの作品を紹介する。(作品はすべて佐賀県立美術館蔵)

○藤田 遜(ふじた・そん)

生年不詳～1917(大正6)頃

基山村(現三養基郡基山村)出身。大正3年東京美術学校西洋画科本科を卒業。同級生に小出楯重がいた。将来は教員志望であった。

藤田の母校卒業の同年、佐賀市にて第1回美協展が開催されるが、その目録によれば、かれは洋画部門に計52点の油彩画を出品している。これは他の出品者と同くらべ抜き出た数であり、若き俊才としておおいに注目を集めたと思われる。しかし程なく夭折し、大

正6年の第4回回展では、かれの遺作展示室が設けられた^②。

現在、唯一伝えられる油彩作品《花》は、板の地色を生かした暗晦な色調で、その描写は単なる写生を超えた、独特の造形性、主観性を感じさせるものである。

○大江貢五郎(おおえ・とらごろう)

1892(明治25)～1963(昭和38)

小城町(現小城市小城町)に生まれる。大正6年東京美術学校西洋画科入学。卒業後は帰郷し、農業に従事しながら制作をおこなった。官展等には出品せず、郷里の美協展を唯一の作品発表の場とした。またその人となりは「作品の評論には独自の考えを持っていて、(美協会の)会員も耳を傾けていた」^③といわれ、地方画壇の熱気をささえる重要な役割を担ったひとりだったことがうかがわれる。

美協展の目録中、大正9年の第7回展よりかれの名が見え、以降出品を続けているが、その出品作のいずれもが静物画か風景画である。唯一伝えられる作品《男の像》は人物画であり、容貌から自画像である可能性もある。かれの画風は同じく佐賀出身で美校卒業の山口亮一^④に近く、自然を明るくい色調で描写する穏健な画風を志向した画家であったと思われる。

○中島正貴(なかしま・まさき)

1895(明治28)～1937(昭和12)

脊振村(現神埼市脊振町)に生まれる。大正3年上京、白馬会の英橋洋画研究所に入る。そこで高須光治の案内により岸田劉生をしり、草土社に参加した。草土社の第一回展覧会となった大正4年の「現代美術社主催第一回美術展覧会」から、その後草土社解散の大正11年、第9回展まで、同人として毎回出品を続けている^⑤。

大正5年、第3回草土社展覧会の目録によれば、当時の中島の連絡先は「東京市外代々木山谷146」であり、大正6年以降は静岡県浜松市に暮らした。同目録中、かれに対して岸田が言を寄せているが、岸田はか

れを「自分の友だち」としたうえで、その作品を「氏の繪は靜かだ。穩かだ。丁度氏に會つて居る様な感じだ。(中略)氏の繪からは飾らない素朴な愛と靜かさを受けると賞賛している⁽⁶⁾。なお、草土社解散後は春陽会展、国画会展に出品した。

岸田の細密描写、リアリズムを志向した佐賀県出身の画家は中島ひとり、作品《静物》を見ると、その画技は固さを残すものの、なかなか堂に入ったものである。しかし残念ながら、現時点でかれが佐賀県内で作品を発表した形跡を見出すことはできない。

○鶴 清気 (つる・はるき)

1863 (文久3) ~ 1938 (昭和13)

高木瀬村 (現佐賀市高木瀬町) に生まれる。明治14年から佐賀中学雇教員となり、断続的に勤務しながら明治12年頃から洋画を長崎と京都で学ぶ。教員を辞した後、京都で田村宗立につかふたが洋画を学んだ。達磨絵等水墨画も多く手がけており、「清屋」の号をもちいた。

鶴が初めて洋画を学んだとされる明治12年といえ、ちょうど百武兼行の渡欧期、パリでの洋画修業期と重なる。かれが百武の絵を実見していたかどうかは不明だが、明治期の佐賀において、かなり早い段階で洋画への関心をしめしていたひとりであることは注意されるべきであろう。

なお、鶴と作品《清流》についての詳述は拙稿「鶴清気の油彩画」(『佐賀県立博物館・美術館報』132号平成16年)を参照されたい。

○松尾松涛 (まつお・しょうとう)

1883 (明治16) ~ 1962 (昭和37)

今回取り上げた画家の中では、もっとも長命を葆ち、多彩な経歴を持つ人物である。

藤津部久間村 (現嬉野市垣田町久間) に生まれる。本名は園藏。雅号の「松涛」は鍋島家より授かったといわれる。ソビエト、スペイン各国の美術大学で学び、イギリス、フランス、ベルギー、アルゼンチン等の展覧会に出品した。また国内外で数十回にもおよび個展を開催している。大正7年には第12回文部省美術展覧会に《網繕ひ》が入選をはした。

大正10年より東京都杉並区荻窪に居住、制作活動の拠点とするが、昭和18年火災にあい、所蔵していた三百枚の自作を焼失してしまう。経歴から推察して国内外各地にも作品を残しているはずだが、現時点で現存、所在が判明しているものはきわめて少ない。佐賀県内では初期の泥絵風、さらに外光派風の作品なども散見される。

《能面のある静物》は、おそらく昭和10年頃の作品と考えられ、形態、色彩の正確な描写は、松尾が高度な写実の技量をそなえていたことを伝えてくれる。しかし当時としては古風な画風である印象はまぬがれず、時流に与しない独自の方向性を模索した画家であったと想像される。さらに、国内の他の画家との交流についてもまったく分かっていない。

年代は不明であるが、フランスのサロンに《牧場の朝》と題する作品を出品したという記録があり、おそらく《風景(牧場)》(本誌表紙図版参照)と類似した作品ではなかったかと考えられる。

(学芸員 野中耕介)

- (1) 佐賀美術協会とその展覧会については、拙稿「佐賀美術協会の資質について」(平成17年「佐賀県立博物館・美術館報」134号)を参照されたい。
- (2) 藤田の記述については、松本誠一「山口亮一先生誕100年記念特集 大正期の佐賀美術協会」(昭和55年「新郷土」378号 新郷土刊行協会)および「東京芸術大学百年史 東京美術学校編 第二巻」(平成4年 財団法人芸術研究振興財団、東京芸術大学百年史刊行委員会)所収の大正3年5月31日「東京美術学校返事」を参考にした。
- (3) 大江の記述については、山口孝行「佐賀美術協会の思い出」(昭和48年「新郷土」286-291号 新郷土刊行協会)を参考にした。
- (4) 1880 (明治13)~1967 (昭和42)。佐賀市に生まれる。東京美術学校卒業。卒業後は郷里に戻り、佐賀美術協会の世話役をつとめ、佐賀師範学校で教鞭をとるなど、佐賀県内の美術普及に多大なる功績を残した。白馬会に参加、帝展に出品。明るく穏健な画風をなした。
- (5) 中島の記述については「写実の系譜II 大正期の細密描写 展覧会図録」(東京国立近代美術館、京都国立近代美術館 昭和61年)中の略歴を参照した。
- (6) 「第三回草土社目録」(平成14年「近代日本アート・カタログ・コレクション034 フェウザン会/草土社 第1巻」青木茂監修、東京文化財研究所編纂 ゆまに書房)より。

(付記)

松尾松涛については、当館作成の略歴を基に「松尾松涛画伯個展案内」(昭和15年)、および松尾達也氏の談話、正木義彦氏より御提供いただいた資料を参考にした。紙面を借り感謝を申し上げます。



藤田 遜(花) 油彩・板
22.1×15.6



中島正貴(静物) 1926(大正15) 油彩・カンヴァス 37.8×45.5
右下「大正丙寅 正貴寫」



大江寅五郎(男の像) 油彩・板
33.2×23.8



鶴 清気(清流) 油彩・カンヴァス 62.5×132.0



松尾松涛(能面のある静物) 1935(昭和10)頃カ 油彩・絹
42.2×75.9 右下「shoto Matsuo」

展覧会報告

夏休み子どもミュージアム「探検!!美術館一名作をさがせ!」

平成18年度 佐賀県立美術館特別展

夏休み子どもミュージアム2006

探検!!美術館? 一名作をさがせ!

7月14日(金)~9月3日(日)

佐賀県立美術館 佐賀市城内1-15-23 Tel:095224-3947

合言葉は「作品をより親しみやすく」

美術館の要である“コレクション”。佐賀県立美術館は昭和58年の開館以来、佐賀県ゆかりの美術資料・作品の収集を続けており、現在その数千点をかぞえる。これらは各種常設展示で逐次公開しているのだが、常設展示全体の構成上、どうしても作品とその出品数が固定されてしまいがちである。

そこで、幅広い内容をもつ美術館コレクションをより多く、より親しみをもって見ていただくこと、「夏休み子どもミュージアム」のメイン企画として美術館常設特別展「探検!!美術館一名作をさがせ!」(7月14日~9月3日)を開催した。各作品のキャプションに書かれたクイズを解きながら、二つの展示室および館内各所を巡り、美術館内の「探検」気分を味わっていただくという趣向である。展示作品は近代~現代の日本画、洋画、版画、彫刻等計115点。これは私たちの

通常の常設展にくらべ二倍近い数である。

今回、展示にあたって、お客さんにはできるだけ「自分なりの見方」で作品を見ていただきたいと思い、作家の経歴や時代背景といった教養的な解説を最小限にし、時系列にしたがった展示の順番をあえて避けた。展示項目の構成も作品のモチーフ別に大きく括るだけのゆるやかなものとなっている。また、各作品のクイズは①描かれているモチーフをよく見れば解けるようなごく簡単なもの②「あなたはどのように見えますか? 感じますか?」等、鑑賞者の感性、主観を問うものの二種類とした。ワークシートを片手にクイズを解くことで、知らず知らずのうちに全館内を歩き、作品をじっくりと見つめることをうながすしくみである。

本展は小学生を主な対象としたが、結果的に大人も十分楽しめる内容となり、家族で熱心に作品に入り、ああでもない、こうでもないかと相談しながらクイズを解く光景がしばしば見られた。また「いつもと違った雰囲気を楽しむ」という意見も多かった。

「あまり難しいことを考えず、まず作品に親しみを感じて欲しい」という私たちの目標は、何とか達成できたように思う。

笑顔の影に、苦心あり

今回の展示は大作絵画や等身大の彫刻も多かったため、展示方法とスペースの確保に思い切った工夫が必要であった。作品保全のため温湿度、照度等を気づかいながら、分野別にせず、すべての作品を渾然と配置する。絵画は場所により二段掛けをおこない、さらに展示室に収まりきれない作品は、博物館と美術館をつなぐ回廊にずらりと並べられた。もちろん展示作業は私と展示作業員の方々だけではとても手が足りず、学芸員総出であたらねばならなかった。その結果できあがったのは、一見、窮屈で雑多な印象を与える、従来の私たちの感覚からすれば、お世辞にも美しいとはいえない展示であった。しかしこれは最初から意図したところで、私としてはここを“迷路状になった倉庫”あるいは“おもちゃ箱”のような雰囲気にしたいと考

えていたのである。

もちろん、少々型破りな展示方法なだけに問題も多かった。移動壁面を多用した展示室には必然的に死角が増え、会場監視の目が十分に行き届かず—もちろん結界の設置、作品固定等の安全対策は施していたが—子どもたちの奔放な鑑賞態度に肝を冷やす瞬間が幾度もあった。さらには、展示したある画家のお弟子さんから「先生の作品をこのように（窮屈に）飾るとは何事か」と、きついお叱りの言葉をいただいた。その作品にふかい愛着をもつ方々にとってみれば、不本意な展示状況に感じられたのだろう。展覧会の趣旨は説明しご理解いただいたが、作品を「見せる」ことについての難しさを改めて知った。

しかし、こうした苦心の甲斐あってか、館内は連日家族連れで賑わい、最終的に会期中計1万人を超える来館者があった。作品を展示させていただいた現代作家の方々も来館されたが、かれらの口ばいに展覧会の評判が広まっていったのも、入館者増に効を奏したようであった。

ギャラリートークにもひと工夫

当館では毎週土曜日、展覧会にあわせて学芸員によるギャラリートークをおこなっているのだが、今回、展示作品と作家の解説を中心とした従来のやり方を大きく変え、来館者と作品を「いっしょに見つめ、考えてみる」というスタイルをとった。つまり、まずこちらから来館者に作品の印象や考えをうかがい、それを土台に全員で作品についてディスカッションをおこなうという方式である。

例えば、中沢弘光《八月》（挿図参照）に見られる二つの「謎」—①画中のふたりは何を見ているのだろう、②男の子が手に持っているのは何だろう—について、お客さんとともに語り合う。「…八月だからお祭りをやっていて、何かの出し物を見ているのだろう」「きつと盆踊りだよ」「いや、マジックかもしれない」等々、まさに十人十色のさまざまな考え、意見が飛び交う。結局のところ二つの謎の答えは「謎」のままなのだが、子どもも大人も何かを発見しよう—絵を読み取ろうと、大変な集中力で絵を見つめ、思い思いの考えを披露してくれる。通常のトーク時には見られない、生き生き

した表情と笑顔を見せるお客様たち。誰でも気兼ねなく参加できるトークの内容に、皆意表を突かれ、かつ満足した様子であった。

「発見するよろこび」を感じ、分かちあう場所でありたい

作品を見る、あるいは作品に触れるとは、いったいどういうことだろう。

「作品の正しい見方、鑑賞のしかたを教えて欲しい」と、私たちに要望されるお客さんは多い。その背後には、作品の鑑賞には作品・作家についての予備知識が不可欠である、という考え方があろう。もちろんそうした知識の有無、多寡が鑑賞体験をより豊かにすることについては異論はないし、私たちもお客さんに対してそれを叶える働きかけをおこなってきた。だがしかし、私たちはそれを当然のこととし、それだけに甘んじていてよいのだろうかと思うのである。

作品鑑賞は「まずは無心に触れること」からはじまる。ある作品に生まれて初めて触れた時、感じること、沸き起こる印象。そうしたひとりひとりの目、見方がもっと尊重されてよいのではなかろうか。私たち美術館人はいつも、そのことを思い出す必要があるのではないかと思う。今回の展示はそうした私自身の思いが大きく反映されているものでもあったのだ。

現在、全国の博物館・美術館施設の運営とあり方を巡って、さまざまな論議がおこなわれている。もちろん当館も例外ではなく、いっそうの予算緊縮がすすむ中、私たちはこれまで以上に、ひろく美術館の存在をアピールし、より多くの来館者を集めてゆかねばならない。そのためにはどうすればよいのか。その突破口のひとつが、「お客様との対話」にある。お客様が美術館に何を望んでいるのか、それは他ならぬ「お客様自身に聞くべし」。本展を通じて、そんなあたりまえのことを思い出した次第である。

（学芸員 野中耕介）

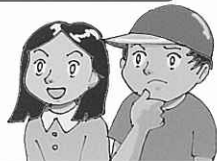
クエスチョン
ふだりが見ているものはなんでしょう。



はち がつ なかざわひろみつ
八月 中沢弘光

1899（明治32） 油彩・カンヴァス
佐賀県立美術館

夏の日、日ざしがよくひょうげんされていますね。なんだから楽しそうです。



「探検!!美術館一名作をさがせ!」作品キャプション。作品をより親しみやすく感じていただけるよう、115点の出品作のうち60点程度にクイズを設けた。



「探検!!美術館一名作をさがせ!」会場風景。日本画、洋画、彫刻等計115点が展示された。



(左)

本展と同時に開催の小学生を対象とした「ギャラリースケッチ」の風景。展示された作品の中から自分の一番好きな作品を描く。なお、子どもたちが描いた作品は、会期中展示室内に飾られる。

子どもたちにとって、自作が美術館に飾られる嬉しい機会とあって、人気を呼んだ。

展覧会の開催 《博物館・美術館主催による展覧会など》

- 企画展** 会場：美術館2・3・4号展示室 観覧料：有料
平成18年10月27日(金)～11月26日(日) 「肥前路を行く—江戸時代の佐賀の道—」
- 常設特別展** 会場：美術館2・3号展示室 観覧料：無料
平成18年7月14日(金)～9月3日(日) 「探検!!美術館—名作を探せ!—」
平成18年12月1日(金)～12月24日(日) 「佐賀の染織—更紗・緞通・錦—」
- 博物館 テーマ展示** 会場：博物館3号展示室 テーマ展示コーナー 観覧料：無料
平成18年4月11日(火)～5月14日(日) 「一年一作 松尾忠次」……工芸
平成18年5月16日(火)～6月25日(日) 「錦絵にみる明治」……歴史
平成18年6月27日(火)～8月6日(日) 「鍋島緞通の美」……工芸
平成18年8月8日(火)～9月20日(水) 「生き物のふしぎを見ようIV」……自然
平成18年10月12日(木)～12月3日(日) 「岡田三郎助」……美術
平成18年12月5日(火)～1月14日(日) 「発掘された佐賀II」……考古
平成19年1月16日(火)～2月25日(日) 「岸派の画家・天岳」……美術
平成19年2月27日(火)～4月8日(日) 「くじら物語—絵巻物にみる江戸時代の捕鯨」……民俗
- 美術館 『玉手箱』** 会場：美術館1号B展示室 観覧料：無料
(博物館・美術館が所蔵する選りすぐりの名品を紹介します)
平成18年4月11日(火)～5月21日(日) 「埋められた経典・大和築山瓦経」
平成18年5月23日(火)～7月2日(日) 「蘇った絵画II」
平成18年7月4日(火)～8月6日(日) 「霊木化現 平安の神と仏」
平成18年8月8日(火)～9月20日(水) 「知られざる佐賀の画家たち」
平成18年10月12日(木)～11月26日(日) 「岡田三郎助の傑作(薔薇)」
平成18年11月28日(火)～1月14日(日) 「豪奢の極み 秀吉の時絵風呂桶」
平成19年1月16日(火)～2月25日(日) 「金色の肌の光 光浄寺の日光・月光像」
平成19年2月27日(火)～4月8日(日) 「吉野山園屏風」
- 美術館 「肥前刀」** 会場：美術館1号A展示室 観覧料：無料
- 美術館 コレクション展・テーマ展示** 会場：美術館2号または3号展示室 観覧料：無料
平成18年4月14日(金)～5月28日(日) 「平成17年度新収蔵品展」/「野村昭嘉展」
平成19年1月1日(月)～1月28日(日) 「吉野ヶ里遺跡発掘20年」
平成19年3月2日(金)～4月8日(日) 「白雨コレクション展」/「石本秀雄展」

佐賀県立博物館・美術館報 第137号

平成18年12月15日

編集発行 佐賀県立博物館・美術館

〒840-0041 佐賀市内1-15-23 ☎0952-24-3947 ☎0952-25-7006

ホームページアドレス <http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kankobunka/k-shisetu/hakubutu/index.html>

E-mail hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp

印刷 大同印刷株式会社